

「言葉の院外処方箋」

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

第 71 回

『荒波を乗り越える ～ 見据える胆力 ～』

筆者は、最近、「コロナ時代から、私たちは 何を学ぶべきだと 先生は思われますか？」』の質問を頻繁に受ける。まずは、「曖昧なことは、曖昧に答えるのが 科学的である」→「がん学者」の基本精神は、「先楽後憂ではなく、先憂後楽であるべき」→しかし、「過度な自粛ムード vs 軽度な自粛ムード」の違いを語る。勝海舟(1823-1899)の、最悪を考えて、準備しながら、『世間の騒擾に一喜一憂せず「綽々たる余裕」』で「過度な不安」の風貌を示さず 最善を尽くした 胆力！これが、「真のリーダーですね！」、「純度の高い専門性」と社会的包容力、『大切なことは、「常識的」に行動する』と いつもさりげなく 答える。今日(2021年8月22日)は、「先人が 維新の荒波を乗り越えたように、先生から、先人の教えから コロナ(渦) 禍をどう乗り切れたと思うかを 高校生、大学生に ご講義頂き、我々は 次世代、次々世代へ どう教訓とすべきか等 お話いただけると すばらしいですね。」との心温まる励ましのメールを大学から頂いた。

筆者の恩師は、南原繁(1889-1974)が、戦後最初の東大総長のときの学生で、「スケールの大きい、愛情豊かな人物だった」と、南原繁の話を よく聞いたものである。「時代を動かすリーダーの 清々しい胆力」としての「人間の知恵と 洞察とともに、自由にして 勇気ある行動」(南原繁 著の「新渡戸稲造先生」より)が 鮮明に蘇る 今日この頃である。筆者は、時々、内村鑑三(1861-1930)、新渡戸稲造(1862-1933)、南原繁、矢内原忠雄(1893-1961)の 墓のある多磨霊園を時々訪れる(画像)。いつもと 変わらず ブレない人物の訓練こそが、まさに「コロナ時代」の学びであると考え。「はしるべき行程」と「見据える勇気」では なかろうか！



南原繁



矢内原忠雄「清き岸べに」



新渡戸稲造



内村鑑三



内村自筆より

